
黒歴史ノートより愛をこめて

左藤鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒歴史ノートより愛をこめて

【Nコード】

N3921Y

【作者名】

左藤鈴木

【あらすじ】

ネタは思いつくけど、それを話数のある文章にできない。妄想をするのは好きだけど、それを形にするのはめんどくさい。

せっかく思いついた良さげなネタなのに死蔵するのも気が引ける・・・
・
ネタを書くだけだけなら俺ってば負けないんだぜ！

こんな設定ならこんな展開に・・・クククツ・・・って妄想させてやる！

黒歴史ノートを読み返そうとしても、あまりの恥ずかしさになかなか読み進まない僕の送る現在進行形私的黒歴史戦慄厳選短編未満小
噺集！やめろ、手が勝手に！

恥ずかしい ワタシ を もっと 見て ！

ISに乗れない女子の話（前書き）

このほかには、ゼロ魔にパチエを突っ込んだやつとか、ホワイトス
ネイクのスタンドを持った型月の封印指定執行者とか、殴りメデイ
のVRMMO閉じ込められ系とかストックがあるよ！

ISに乗れない女子の話

IS - 世界で唯一ISに乗れない女性 -

いちわめ！

「世界で唯一ISに乗れる男」と言えば織斑一夏が有名であるが、「世界で唯一ISに乗れない女」と言えば桐生水守である。ISに乗れない女性と分かったということは、普段からISを身近に置く立場の者であるだろうなと予想できるが、彼女はIS開発メーカーの社長であった。研究者でもある彼女は、第三世代型ISの開発に伴い自らが専攻していたイメージ・インターフェイスと脳の基礎と応用の技術で持っていた一つの会社を立ち上げた。まあ、言わずもがなアジア圏有数の企業グループの桐生財閥が嫡子であった彼女は、両親からの資出だよりに起業したのであった。しかしその実力は今や昨今のIS業界にとっては欠かせないものとなるまでに成長していた。

そんな彼女であったから、開業直後にIS適性が全くないと分かったこと自体はあまり問題ではなかった。

しかし、世の中はこの情報に混乱した。今や分け隔てなく世間にはこびついている女尊男卑の根本は女性がISを使うことにある。ここにきてISが使えないこともあるだなんてわかつてはその優位性が失われてしまう、これにより一時的に全世界は大パニックとなった。桐生社に殺到する抗議・質問・罵倒や称賛の問い合わせは男女から平等に分け隔てなく殺到。居間のニュースの話題を独占し、一時は桐生に対しての不買運動すらおこったがあの桐生社がその程度でダメージを受けるはずはなかつしか暴動は治まっていた。未

期には、原因を探るための水守社長への精密検査も終わり、原因が「ごく一部の人間に発生する遺伝子的な不適合」でありかつ「発生する確率は1000万人に一人」という奇跡的な確率もあって、いつの間にかこのニュースは情報の渦へと消えていった。この事件により全世界の人々は、「桐生水守」と”one to one's works”の名前を叩きつけられたのだった。

久我直美という人物がいる。バイク、自動車、レーシングカーから始まり、果ては戦闘機まで乗りこなす生まれつきのテストドライバーである。生来のスピード狂の最速主義者であった彼女は同じくらいか、それ以上に突飛な行動の多い桐生水守の幼馴染であり腐れ縁である。最速を目指すために最新鋭の乗り物を取り回している彼女はがISという最速への可能性を見逃すはずもなく、個人的な縁もあって桐生水守の会社所属のIS乗りとなった。ISが乗れないうえに第きぢょうの社長であると、狙われる理由に事欠かない水守であったので、ボディガードは必須。ならばと水入らずのなかであった久我に専用機を渡し、同時に久我をボディガードに拝命。以降二人は付かず離れずの関係となった。

水守の元から久我が離れたのは今日まで数えてたつたの二回だけであった。一度目は久我の単独行動で、二度目は水守の独断のせいであった。そこにはいずれも織斑一夏が関わっていた。

「おいおい、大事な決勝戦を抜け出してまでどこ行くつもりだ、織斑千冬？」

脚部を覆うドピンクのISをつけた久我が言う。腕を組んでの仁王立ち、しかしここは空中である。派手なブーツでも履いているのかという程度の軽装である彼女のISは飛ぶというよりも立つといったほうがいい気軽さと安定感で空にいた。おそらくそれが彼女の単一使用能力なのだろう。

織斑千冬のはるか後方、しかし彼女にとっては無いに等しいその距離で久我が話しかけた。

それに対し千冬は立ち止り一瞥をくれただけであった。決勝戦の相手。最速のIS。しかしそれにかまっている暇は、今は無い。私は早く行きたいのだ、との思いが態度に出ていた。

「おいおい、私がミノリと別れてまで時間作ってやってんだ。その態度は無いんじゃないの？」

大事な大事な弟君が誘拐されちてちゃあ、しょうがないとは思っているぞ。」

久我がそう言い終わるか否か。織斑千冬は振り向きざまに久我に対して剣を抜いた。瞬時加速からの逆袈裟切り、避ける暇などないくらいの高速。手ごたえを確信しなげそのことを知っているのかどう尋問すよつと考えはじめるも驚愕によつてそれは打ち切られた。ありえない手応えのなさ、そこに久我がいなかったのである。

「おうおうおうおう、いきなりだねえ。いきなりやってくれるねえ。いいじゃんかそついうの、遊ぼつぜ？」

千冬の真後ろから声がかかる。同時に飛んでくる衝撃、いや後から放ったはずなのに彼女のハイキックのほうに僅かに速い。なんとか

体制を整えながら辛くもそれを受ける千冬であったが、その心は暗い。

会話の時間を設けたいのかご丁寧に久我は自分の刀との鏝ぜりに答えている、千冬は考える。おそらく千冬が決勝に棄権することを察したのであるが、そしてこう考えたのであろう

「あたしは、織斑、あんたとヤツてみたいんだ。」

その精神には敬意を表したいし、その実力も申し分ない。がしかし今の千冬には、弟を誘拐された自分には、時間がない。あまりにも足りない。

「それに、じゃないと会えないぜ？ 弟君にはよ？」

その瞬間、千冬表情が変わった。目は見開かれ、葉を噛み縛っているのがきつく結ばれた口の上からでもわかる。

迂闊であった、不注意であった。はじめのセリフでわかる、一夏がさらわれた事を知っている。それにこの場所はモンドグロツソの開催場からかなり遠い海洋上である。久我は目的と行き先を分かっている千冬を追っていたのである。つまり

「弟君は私たちが預かっている。」

瞬時加速、その瞬間に急激に千冬に圧がかかる。ISの守りをもつてしても身体操作すらままならないGである。

「ッ……!!」

急激に後ろに飛ばされる千冬、ただ飛ばされているだけでシールドエネルギーが減っていくのがわかる。

「うおおおおお！！！！」
無理矢理に腕をふるい、零落白夜によって周囲を切り刻む。
糸であった。千冬の周りには鋼糸が絡みつき、バカでかいブースターと繋がっていた。ひたすらにそれを切り刻む。

「あたしのISはラディカル・グッドスピード！なんでも速くすることができまーす！」

自己紹介ですとばかりに繰り出された技とセリフによって、千冬はキレた。全体を見渡す観の目で久我を見る。ただ全体を覆うような古スキンで流線型の機体が目に入った。ハイパーセンサーに映る久我の打ち出した高速の弾丸の中へと飛び込む。自らの機体に当たるものだけをその刃で破壊しつつ久我へと攻撃を仕掛けた。久我に対して自分は速さが足りない、千冬はそう自覚していた。始めの奇襲は手抜かったとはいえかなりトップスピードに近いものだった。それをまるで余裕によけ切られたのである、現実問題として千冬は彼女に追いつけないだろう。

だからこそ攻める。今の攻撃で久我は遠距離攻撃もできると分かったが、それでは速さとともに攻められると一方的にいたぶられてしまう。
ゆえに近づく。接近戦であれば、こちらに当たらないと当てれない。向こうが攻撃するということは、つまり向こうからやってくるということである。そこを討つ、一撃でのダメージが大きな千冬になら、まだ挽回のチャンスはある！

「衝撃の」

久我の機体は、かつて彼女の好きだったテレビ番組からのオマージュでできている。そのぶん思い入れは一塩であるし、羨望、憧憬、

目標意識は自ずと高まる。

「ファースト・ブリット……!」

「零落白夜! 迎え撃つ!」

重なる斬撃と蹴撃。最速への一步を踏み出す久我に対して、後の先を先んじて相撃ちとした千冬。雲は弾け水面は波打つ激闘が幕をあけた。

「あいつ、嫌い……」

篠ノ之束がそう漏らした。そこにいるのは今は寝静まった織斑一夏と、疲れた顔をした織斑千冬だった。

「安心しろ、わたしもだ。」

結局、久我と千冬の勝負は久我のISのエネルギー切れで千冬が勝利した。その直後に篠ノ之束および桐生水守から通信が入ったのだ。

「初めまして、私は桐生水守。ここではてる直美の上司にあたります。一夏君はあなたより先に私の情報ネットと直美のRGSで最速に助け出していて、今はこの病院で眠っています。ああ、けがとかはありませんよ、念のためです。」

画面の後ろで寝ている一夏を見てひとまずの安心を得た千冬は、あまりの事態の落差に安堵というより落胆し盛大な溜息を一つついた。続けて束が発言する。

「そのいつくんは本物だよ、私が保証するよ。それと、ちーちゃんは大丈夫だった？あいつに何か変なことされてない？」

「やだなあ束さん、わたしたちがそんなことするはずないじゃないですか」

鉄板でも貫けそうな束からの視線を受けてなお飄々とする水守である。千冬・久我ペアが移動し戦っている間に、水守は束との対談を果たしていた。無論、画面越しであったがそれは水守にとって大変有意義なものだったらしく顔が綻んでいた。対して束は終始不機嫌であったが。

なおモンドグロツソ自体は決勝戦が開催されなかったので、優勝者無しという結果に終わった。

ここから数年後、IS産業においてさらにシェアを拡大したOOW社と織斑一夏は、亡国企業を巡る戦いにおいて本格的に関わりを深めていくことになる。

ISに乗れない女子の話（後書き）

桐生水守

OW社（one to one's works）のトップにして親会社である世界的大企業を持つ桐生財閥の次期社長（候補）。ちなみに社名はダブルオーダブルと読む、カッコ良さげな名前だからこうつけた。たいていゴツイ浮遊型車いすに乗っているが、実はこの車いすは電子制御の小型ファンネルつきの高性能である。また、彼女の肉体は彼女自身の研究の産物によって攻殻機動隊ばりの義体となっている。じつは脳味噌自体は元男であり、ISの登場を知ったとたんに義体化を行った。なお、遺伝子も薬品で後天的に変質させており、外部思考装置として人口ニューロンで作った人工脳も搭載している。

一夏の白式のデータを使うことで自分もISに乗れるようにしたいと考えている。

ISに乗れない、義体、大企業の令嬢とさらわれ安い立場にいるため、常に久我と一緒にいる。なお、このことで亡国企業には恨みを持っていて、いずれ排除しようたくらんでいる。二回目の単独行動の原因はこれ。

久我直美

モデルは言わずと知れたあの人、ストレイト・クーガー。ただし全然違う人になった。子供のころに見たスクライドのアニメのせいでスピード狂は加速した。口調は乱暴者って感じを意識している。

使用ISは”ラディカル・グッドスピード”であり、単一使用能力

は”アルター”。あらかじめ量子化してあつた装甲を自由に組み替えることができる。これでブースターを即席でくつつけてなんでも加速できるようにしている。ただのゴミを加速させて銃弾みたいにすることもできる。が、燃費が悪いので普段は脚と拳で頑張っている。

なお、原作と絡むのは亡国企業をメタメタするときのみである。

ハガレン転生ご都合主義準最強者(前書き)

警告：以下の文章にはネタバレ、いわゆるスポイラーが含まれています。

ハガレン転生ご都合主義準最強者

年代を感じさせる一軒家の一室。そこは書斎だろうか、分厚い本や薬品の入った瓶、フラスコの類が散らかっていた。部屋自体は広々としているのに、一部の散らかりよりのせいで、狭いような印象があった。

そこに人影が二つあった。するりと立っている女性に、椅子に座った男性の計二人である。

仕事中の夫に声をかけに来た妻にも見えなくはない。

「ずいぶんとあっけなかつたわね。」

しかし、扇情的なほどに胸元をはだけた黒いドレスを着た女がそうつぶやいた。男に向かって突きつけられた指はさながら死刑宣告のよう。指先からは彼女自身の暗く黒い爪が、男の心臓を超えて、彼の目の前にある机に刺さっていた。断じて人間の持つような指爪の鋭利さ、長さではないそれはまさに彼女の異質そのものであり、それゆえ彼女は人外であった。

足元に血だまりを作りながら引つかかるように椅子に座っていた男は、女が腕を振りぬけその矛を収めるとともにどさりと崩れ落ちた。

即死、だろう。

死因は心臓への一突き、他に外傷はなし。

争った形跡すらなく、これは、完璧な暗殺、黙殺であつたらう。

死体は動かない。

死体は語らない。

たった今、この倒れたこの男がいくら真相に近づいていようと、一切の関係は無くなったのだ。その建国から既に陰謀とともに歩んできたアメストリスにとっては、何十何百と繰り返された光景であった。

カツ、カツ、と男の死を確認するめか、確実にするためか、女は彼の頭部を執拗に刺突した。

自在に伸び縮む鋭利な爪をもつこの女はやはり人間ではない。色欲を銘を持つ人造生命の一、名をラストといった。ガソリンをまきながら彼女は、床に転がる男を見据えた。その二つ名と名声、いや、蔑称からは考えられないほどのあっけなさに拍子抜けしつつその家に火をつけ、男の家が焼けおちたのを確認した彼女は踵を返した。

同時に、一瞬に、ラストの体のはじけ飛んだ。

内側からの膨張であった。皮膚を突き破るように血液が、筋肉が、臓物が、文字通り膨れあがり爆散した。およそ人間一人から出るような、出ていいような量ではない血が一面に広がる、生命に対する冒瀆的な惨状であった。

かろうじて残っていた彼女の腰から下がぐらりとゆれるも、おぞましい何かが吹き出るように、発光を伴いながら、高速に人の形に戻る。

「……っ…！ いったい、なに、」

続いて、再びの爆散。ラストの肩口から先が消え去った。刹那、骨が生え肉が被い皮膚を作り、彼女の腕が元にもどる。たたらを踏み、よろけながらも彼女は振り向いた。

そこには、

「いやいや、すごいねえ。知ってはいたけど見るのは始めてだよ、ホムンクルスってやつは。切ろうが裂こうが潰そうが、次の瞬間には元通りだ。厄介なことこの上ないな！ まあ、そのどれも僕にはできないけど。」

つい先刻まで倒れていたはずの、死んでいたはずの

「って、僕が言っても皮肉にしかないかな。いやあ、僕もさっきまでは死んでいた身だしね。ちょっと親しみを感じるよ。親近感ってやつ？」

復命の錬金術師が、ロスチャイルド・ロードロールがそこにいた。

復命の錬金術師といえば、少し前までは気のいい巡回医として、国家錬金術師ながら国民に親しまれていた人物として有名であった。臨床と福祉のためといい各地をまわる彼は、行く先々でヒーローとなった。練達な彼の錬金術は、現在の最新の医療すら上回る成果を振りまいていたのだ。内科外科を問わず、重症軽傷を問わずに治療をしていく彼は、いわく死者をも生き返らせると噂された。

復命の錬金術師といえば、今は狂気の代名詞として有名である。イシュバル戦役。これを経て、いや、この最中に彼は狂人と噂されるようになった。人間を血袋程度にしか認識していないと、彼の通った後には冒瀆的な量の血だまりと、ぶつぶつに飛び散った醜悪な肉塊しか残らないと。彼は噂された。民間軍事を問わず、老若男女を問わずに破壊していく彼は、いつしか狂人と呼ばれた。

戦役後に精神を病んだ彼は精神病院に通いつつ隠居をしたという。

戦争についてのなにがしかを調べている姿を国立図書館で見かけた、倒壊した研究所から彼が出て行くのを見かけた、などの噂が彼の軽称の広がりには拍車をかけた。

今回ラストが出向いた理由もこれであった。計画の核心へと近づくと危険性と確かにあったその形跡は、人柱候補であるという彼の重要性を上回った。そこにロスチャイルド本人の実力を鑑みた結果がラストによる暗殺であった。しかし、結果としてそれは未遂となる。

「な、んで…」ひきつり戻せないラストの唇をみて、驚愕に見開かれるラストの目をみて、愉快そうに彼がうすら笑った。

「はっはーまさにしてやったりだよね愉快痛快！今まで自分のしてきたことをやられた気分はどう？」

ロスチャイルドが一步、彼女に向かって歩み出す。

「今の質問だけどねえ、いいよ、特別に答えてあげるよ。ほら、僕って二つ名の通り治療系の錬金術が得意じゃないか。実は僕って全身に練成陣を書いててさ、自分がけがをしたら自動的に復元できるようにしてあるんだよね。頭を吹き飛ばされようが心臓を潰されようが、死後数瞬は魂が体に留まるから、その間に欠損を無くせば生き返るって寸法だよ。」

ゆっくりと彼がラストににじり寄っていく。それに合わせるように

じりじりとラストは後退していった。

「ありえないわ。等価交換の法則を無視しているじゃない。」

ロスチャイルドが歩みを止める。合わせて、ラストも後退をやめた。あまりの事態に焦燥し混乱していた彼女は会話をしていく中で次第と冷静になっていった。

「ありえないなんてことはありえない。」

「確か君達のお仲間のグリードの口癖だったかね。100年近く会ってないだっけか。そうそう、エンヴィーのヒステリーは治った？ グラトニーはまだ太ったまま？ お父様は元気？」

19

「賢者の石は増えてる？ 人柱はそろった？」

矢継ぎ早に、彼は言う。まるで二人が旧知の仲のであるかのように、まるでそれらが公然の秘密であるかのように、彼は言った。

「あなた、どこまで知っているの？ それは調べて行って行き着ける

ようなものではないわよ？」

険のある目をさらに細め、ラストは聞いた。この男はどこまで知っているのだろうか。このままでは計画が破たんする可能性すらあると、彼女は危機感を募らせる。

「どこまでって、曖昧な聞き方だなあ。君達ホムンクルスは賢者の石を核にしている人造生命体であることや、エンヴィーのは返信能力を持ちその体は賢者の石にされたクセルクス人たちの血肉でできていることや、グラトニーの腹部は異空間につながっていることや、プライドの本体は陰であり普段は大總統の息子に扮していることや、軍上層部のほとんどの将校達はお父様の協力者であることや、大總統はホムンクルスであることや、イシユバルの内乱を起こした将校はエンヴィーが変身したものであったことや、建国当初から各地で起こる内戦は国内に血の練成陣を作るために人為的に起こされたものであることや、次に血を見るのはブリックスであることや、賢者の石は人間の魂を基にしていることや、スロウスが掘り進めているアメストリスを覆う円環は国土練成陣に使われる予定でありプライドの本体はそこにいることや、お父様は大總統府の地下にいることや、セントラルの地下には賢者の石を基に動く不死の人形群がいることや、お父様の正体はクセルクス人の魂を核にしたホムンクルスであることや、アメストリスの地下には賢者の石を常に流動させているパイプラインがあることや、アメストリスの錬金術はその賢者の石のエネルギーで行われていることや、人柱と国家練成陣を使ってお父様が神になろうとしていることくらいしか僕の知っている情報はないよ。」

脱力。虚無感。圧倒的な不気味さが彼女を襲った。ラストを襲うそれらに抗い、かたかたと震える脚に力を入れてかるうじて彼女は立っていた。なぜ知っている、どこで知った、どうやって知った、あるいはどこから漏れた、誰が漏らした。奴は、目の前にいる不気味なこの男は一体“何”だ？

「あの男は何を知っているの？」解消することのない疑問が脳裏を巡る。

いまだかつて味わったことのない虚脱感を、無力感を、敗北感を。恐怖を、不可解さを、得体の知れなさを。ラストは味わっていた。勝利を、優位を、全能感を、味わわれていた。

体から熱が逃げていく感覚を、ぐるぐると回転する視界の中で感じながら、吐き気すら覚えている彼女は自身の誇りである最強の矛を展開した。

絶体絶命、空前絶後、前代未聞。なすすべがない。遅れに遅れた手遅れが周回遅れをして、何の問題もないと感じさせるほどであった。是が非でも消す。何としても打ち倒す。最悪でも殺す。まさに最後の足掻き。開き直り。

「そこまで知っているのなら、死になさい。」

己の存在をかけて、彼女は自身の矛を振りかぶった。

何回殺されたのだろうか。ラストの爪先が彼に触れると、彼女の想像とは逆に彼女の命が削られていった。触れた瞬間に彼女の腕がはじけ飛ぶ。すぐ後に再生、破壊、再生。それが繰り返されると分かっている。彼女にはそれを繰り返すしか、それ以外に選択肢はなかった。しかし、そんな身を削る均衡にも終わりが訪れる。

「じゃあそろそろプライドも近づいて来ているみたいだし、終わりにしようか」

事もなげに、つまらなそうにロスチャイルドは言った。吸い込まれるように彼の腕がラストに向かいのびる。ずぶずぶと、まるで人間の皮膚や筋肉が粘土であるかのように軽々とそれらを貫き、彼の腕はラストの胸元に吸い込まれた。彼女の、賢者の石に。

「あなた、まさか」不快感と驚愕に顔をゆがませながらラストが言う。

混沌と蠢くたくさんの何かに繋がった感覚をおぼえながら、ラストは意識を失った。何かが流れ出ていく喪失感と、新たに流入してく

る安心感を、彼女は最後に感じていたのだった。

「ずいぶん手こずったみたいじゃないか、オ・バ・サ・ン。」

見下したような口調でエンヴィーがラストに語りかけた。エンヴィーは性別不詳なサバサバとした長髪の人物であり、底意地の悪そうな顔と人のことをなめきった様な印象の通り、底意地の悪いくそ生意気な人外である。

「ええ、危なかったわ。何回か殺されてしまったほどよ。さすがは狂人と呼ばれるだけのことはあったわ。」

エンヴィーの言ったことが気に障ったのか、予想以上の仕事の厄介さに辟易したのか、ラストは不機嫌そうに返答した。

お父様には「ロスチャイルドの予想以上の抵抗と実力のせいでは手こずりはしたものの、対象の死亡を確認した。現場に残った血痕などは全て焼却済みである。」とラストは報告した。

しかし一方で、なにか重要な、それこそ“計画”に深く関わってきたようなことを忘れていたような気分のまま。今までの自分とは決定的に違ってしまったのにそれに気づけないかのような違和感を抱えたまま。

彼女は次の仕事へと向かっていった。

復命の錬金術師：ロスチャイルド・ロードロール

ハガレンを読んでいた現代人からの転生者。転生を自覚し錬金術を知ってからというもの、ひたすらに医療系錬金術について研磨し続けた。その結果、「戦場における効率的治療法の確立」「非オートメイル系義肢の開発と発展」「過剰再生に見る人体の損傷」についての研究功績から国家錬金術師になる。

イシュバール戦役では、軍医としてかなり初期から軍に同行し、終期には生体練成を人体破壊に応用し参戦。その練成形式から殺害方法は残虐で醜悪なものとなり、“狂気”の通り名を冠するほどに敵以外に味方からも恐れられた。

なお、キンブリーからは趣味どころか考え方の根底から違うといわれ嫌われたいた。

実はこの時、賢者の石を“お父様”たちの勢力とは別に独自かつ秘密裏に製造しており、戦役以降の研究から自分を半ホムンクルスに改造するという偉業を達成している。軍医としてのイシュバール戦参加において軍上層部から賢者の石作成に携わるよう暗に誘いがあつたものの、これに携わつた研究者たちの末路は既に知つていたのでこの誘いには乗らなかつた。

イシュバール戦への同行は純粹に戦争の犠牲者を減らすことが理由であつたが、イシュバール戦役のあまりの悲惨さ・悲愴さに黒幕を倒すことを決意。反逆の計画をいくつも練るも、隠匿の重要性から計画の多くは個人でできるものに限られていた。そのため計画の阻止は成功する可能性が低いと悟り、方針を犠牲者数の減少へと切り替えた。その中で成功し、最も適性があり、かつ効果的であつたものが賢者の石との同化であつた。

つまり、半ホムンクルスとなつた。また、お父様の足元にも及ばないが賢者の石の利用にも秀でている。

なお、賢者の戦争末期の殺害方法のグロテスクさは敵意や戦意を折ることを主眼に置いていたためそうなつたとくに由来する。終戦後、物語の表立つた面々を救うことはしなかつたものの、原作ではその陰に死んでいった多くの犠牲者たちを救つていった。

ここでは、ラストの賢者の石に自分の賢者の石を流し込むことで記憶の改竄と洗脳を行った。

人体練成にかかわった者として鋼の錬金術師が訪れたところから物語は始まる（嘘）。

ハガレン転生ご都合主義準最強者（後書き）

すさまじい中二病っぷりだった！

それに言い回しとか、内容の充実さとか、難しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3921y/>

黒歴史ノートより愛をこめて

2011年12月4日02時54分発行